

● 中 部

水 野 みか子

2014年度、人的組織を大きく変えた愛知県芸術劇場では、7月、大ホール、コンサートホール、小ホールそれぞれに支配人職が新設された。ちょうど20周年を迎えたしらかわホールでは、開館当初の賑々しい自主企画はすっかり影を潜めてしまったが、それでも700席のホールでのシフのリサイタルや雅楽公演、仲道郁代ベートーヴェン・シリーズといった上質の演奏会には根強いファンが多い。名古屋市文化振興事業団は、事業団設立30周年記念新作舞台《時間旅行》によって30年の軌跡を舞台化することに成功。一方で、独自の制作を行い、全24日間毎日催事を行う「やっとかめ文化祭」(中には、音楽学者井上さつきのレクチャーと鈴木政吉関連コンサートもあった)、緑文化小劇場の「ひいおじいちゃんのアルバム」や中村文化小劇場の「アザレアの会コンサート」など、音楽文化が市民生活に浸透するための頼もしい舞台を次々に打ち出した。20年目のシーズンを迎えたAOIでは、ヴラダーとウィーン・カンマー・オペラ、ベレゾフスキー、木越洋、福田進一、AOIレジデンス・クワルテット、弥勒忠史、鈴木雅明のオルガン・リサイタルなどが賑々しく並んだ。

2月発表された平成25年度名古屋芸術賞の音楽分野ではクラリネットのつつみあつきとオペラ演出の池山奈都子が受賞した。つつみは受賞の勢いに乗ってますますプロデュース力を発揮し、ピアノの北住淳、チェロの高木俊彰との三重奏でツェムリンスキーのトリオと水野みか子の新作《かげきじやないかげき》を演奏、また、10年前から継続している作曲家と演奏家の会(MiA)をリードして次々と新作を初演し、さらには、俳優の杜川リントロウとの共同で小塚憲二や渡辺康の新作ミュージカルの初演に携わった。

名古屋二期会は、佐藤正浩指揮のニューイヤーから12月の《こうもり》(飯守泰次郎指揮、三浦安浩演出)まで、歌曲シリーズや新人企画を含めて活発に活動し、天野久美や渡辺純ら若手も活躍。エウロ・リリカでは、2月の《リゴレット》ハイライトや「オペラの魅力」シリーズ(5月、10月)で岡本茂朗、松波千津子、基村昌代、森本ふみ子といったヴェテランと若手が共演。名古屋演奏家ソサエティーは森彩音の三部作《箱入り女房》《八岐の大蛇》《弁慶》を名古屋能楽堂で上演し、澤脇達晴、奥村晃平、山口雅子、小山陽二郎、安田健らが活躍。千住明作曲、黛まどか台本による演奏会形式のオペラ《万葉集》では石川能理子、井原義則らが活躍。なおドイツ・カンマーフィル・ブレーメン管楽ゾリステンと狂言が共演した狂言風オペラ《ドン・ジョヴァンニ》(音楽監修:木村俊光)はインパクトがあったので名古屋では正統オペラよりも評判になった。

中部地区のオペラで今年最も話題になったのは、丹波明の新作《白峯》である。主催はセントラル愛知交響楽団。井崎正浩指揮で中鉢聡、大野徹、飯田みち代、滝沢博らが熱く重い舞台を成功させた。

リサイタルでは、声楽の木下久深子、伊藤晶子、荻野砂和子、佐地多美、新実真琴、ピアノの原田綾子、山内敦子、戸谷誠子、高須博、長野量雄、サヴァリッシュ朋子、岩野めぐみ、石原佳代子、佐藤由美、谷美鈴、福永真弓、大隅摩紀、伊藤わかな、

西典代、チェロの中木健二、クラリネットの竹内雅一、亀井良幸、フルートの片岡博明、橋本岳人、上野由恵らが目立った。その他ピアニストの活躍としては、フルートのジョヴァンニ・マレジーニと共演した内本久美、デュオの清水皇樹・敦子、ローズ・ピアノコンサートでの広瀬恵子、小林功に注目した。ヴァイオリンの島田真千子は宗次ホールのイエロー・エンジェル・トリオ(宗次のNPOから楽器貸与を受ける優れた演奏家たち)としてピアノの佐藤卓史、チェロの辻本玲と手応えある演奏会を実現したほか、「まるごとしらかわの日」でセントラル愛知のメンバーと一夜をプロデュースして注目された。同じくヴァイオリンの竹澤恭子も、イエロー・エンジェル創立11周年記念として江口玲とのリサイタルで貫禄を見せた。

アンサンブルとして安定した活動ぶりを示したのは、トリオ・ミンストレル、2台ピアノの藤本真実と田中一美、管楽器のアンサンブル・カラヴィンカ、中野振一郎とコレギウム・ムジクム、ヴィオラの川本嘉子と中野振一郎のデュオ、ムジカ・ヴィッツ、ストリングス名古屋、リューと弦楽四重奏団、寺田弦楽四重奏団、カーサ五重奏団、ヴァイオリン・デュオの加藤二葉&瑞木らであった。

2月の「ハイブリッド・ミュージック」では三輪眞弘、足立智美らの新作が初演され、「AACサウンドパフォーマンス道場」では「道場」第6回の優秀賞受賞者Hyslomと同第5回オーディエンス賞の〈押尾優×高村聡子〉の作品が、鈴木昭男、The SINE WAVE ORCHESTRAの作品とともに上演された。なお「道場」はこれで最後とのこと。5月には岐阜現代美術館で斉木由美室内楽作品展が開催され、7月にはニンフェール第10回公演において、佐藤紀雄のギターで水野みか子の、佐藤と箏の木村朝耶によって田中範康と伊藤美由紀の新作がそれぞれ初演された。6月の第3回音楽クラコ座公演では、成本理香、今井智景、板津昇龍、斉木由美の作品が演奏された。11月の「電子音楽なう! vol.4」では、みみづ、吉原太郎、水野みか子、大谷安宏、石上和也、渡辺愛、佐藤亜矢子の作品が上演された。

名フィルは藤倉大作品の初演やライナー・ホーネックと共演するハイドンのロンドン・セット・ツイクルスなどで特性を発揮した。定期の中では、マリア・フォシュストロームと望月哲也を迎えたロリー・マクドナルド指揮の3月定期、ブラビンスがヴォーン・ウィリアムズのバス・チューバ協奏曲(独奏は林裕人)やマーラーの《巨人》を指揮した5月定期、尾高忠明指揮でプロコフィエフのヴァイオリン協奏曲(独奏は郷古廉)やウォルトンの交響曲第1番をとりあげた12月定期が特に良かった。

中部フィルは2月の第24回定演と6月の第7回名古屋定演において、アーティスティック・ディレクターの秋山和慶のもと実力を発揮。愛知室内オーケストラは、寺岡清高指揮の第13回定期演奏会をはじめ地域での舞台回数を増やし、2015年には新田ユリが常任指揮者に就任する。

諏訪内晶子による「第3回国際音楽祭NIPPON」は、名古屋では五カ所で六つの催しを実施した。春の恒例名古屋国際音楽祭(第37回)には、ヴェンゲーロフ弾き振りのポーランド室内管弦楽団、榎本大進をソリストとする山田和樹指揮のスイス・ロマンド管弦楽団など七公演、秋冬恒例の名古屋クラシックフェスティバルの第31回(2013年度)の2月公演はマリア・ジョアン・ピリスをソリストとするロビン・ティチャーティ指揮スコティッシュ・チェンバー。3月公演は、ウラディーミル&ヴォフカ・アシケナージによるデュオ。第32回シリーズには、スロヴェニア国立歌劇場の《アイダ》、メータとイスラエル・フィルなど八公演が並ぶ。